

# 風土



神  
隠  
神  
蔵  
器

能ヶ谷に三鬼が立てり柿芽吹く

翡翠のあをき一線のみのこる

一服の抹茶の先に節分草

さやうなら白洲次郎の亀鳴けり

三月の水のうまさや噛んで飲む

遠山火猫の水飲む音のして

尾を立てて子猫の通る月の前

小夜さん

天上の花の茶会に召されしか

囀や遠きことのみよみがへり

袖隠墓抱けば墓あたたかき

不忍になみだ溢るる百合鷗

くれなゐの落花を吐きぬ鯉の口



# 竹間集

同人作品



紅梅

宮川みね子

紅梅や息ととへて墨を擦る  
篋に雪降り込めり実朝忌  
米を磨ぐ井戸水ぬくし春祭  
春の月一日入院終りけり  
果樹園に人の声する陽炎へり  
ヴェネチアのグラスを磨く春ともし  
下萌やつがひの目白来てゐたる

椿濃く

浜福恵

声に出ぬままに追儼の豆を打つ  
久々に辛子を利かす花菜和  
峽に入る金縷梅に日の錦かな  
切株を翔つ山雀や雪解光  
野梅咲く日向に猿の親子かな  
原発ドームを臨み若狭の名残雪  
椿濃く岬に一石一字塚

朧月

山田暢子

書棚には書の指定席木々芽吹く  
みちのくのいぶり大根寒明くる  
日の濃ゆくなりたるところ水温む  
あたたかや身ほとり少しずつ整理  
梅咲きぬどこかで恋のはじまれり  
ボヘミアングラスをひとつ朧月  
かくれんぼしたる納戸や雛納

梅ふふむ

門伝 史会

実朝忌琴のごとくに海の橋  
春の雪新幹線に喪服着て  
梅二月子の名書きたりランドセル  
春愁やアラビア文字の我が名前  
白鳥帰る赤城風の吹く日かな  
堂おぼろ汲めども尽きぬ大茶釜  
開けてすぐたたむ神籤や梅ふふむ

「淡交」以後(五十三)

野沢しの武

風土のちの支那に旅士を迫りて  
万緑を抜け来たる顔歯が笑ふ  
まみ見えたる師の温顔や陸奥の夏  
和歌集海田町小林千んのかげし梅  
こけし木屑吹詰めて梅雨の房  
こけし百二百工房汗冷えて  
こけし工房蔵採るとて主留守  
梅宇市増田町 朝市  
梅雨の閑「またきてたんせ朝市に」  
座敷蔵暗しと入りて涼しとも

薄紅梅

鈴木 石花

何の会議白鳥集ふ沼の隅  
入口に金閣寺垣雛館  
右手男体左手に浅間冴返る  
末黒野を抜けて湯煙湯治宿  
常宿に湯花の泳ぐ雪のひま  
斎場を出て梅林へ脚延ばす  
紅つよき梅過ぎて佇つ薄紅梅

しんこ細工

山路 紀子

一の午かなたこなたに雪残り  
眼を皿にして早春の雑木山  
うすらひや女は手の甲より老いぬ  
雪あかりほのと象牙の仏さま  
うすらひのかけら溶けつつ流れゆく  
湯めぐりの始めは足湯はこべ草  
梅日和しんこ細工に手ののびて

蛇綱の邑

大竹 淑子

葱 育 つ り に 蛇 綱 の 杜 あ り て  
冬 鴟 や 清 水 に 淨 む 蛇 綱 道  
水 音 に 揺 れ て か そ か や 枯 尾 花  
源 は 滝 と 杉 山 寒 の 川  
寒 を 行 く 蛇 綱 の 法 被 裾 に 雲  
蛇 綱 行 く 寒 の う す 日 の 照 り て を り  
寒 晴 れ や 神 酒 を 含 み て 蛇 綱 衆  
女 童 の 頭 を 噛 む 所 作 の 蛇 綱 かな  
村 里 に ほ ど よ き 雪 の 蛇 綱 かな  
寒 の 虹 立 つ て 蛇 綱 を 見 て き し 目

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

早春のみ空にメタセコイア触れ  
森田 節子

水青の方へ歩の向き日永かな  
三歳の言葉日増しに芽吹きかな  
海苔箸や湾の陽光うたひ出す  
金色の雲のたてがみ冴返る

十井ゆう子

労りは言葉にならず室の花  
朝の雪きしきしと踏み投函す  
湯治湯に効能書や冬木の芽  
春の雪壁に青児のをんなかな  
深海のごとき北空寒満月

内藤 静

梢はや潤みて来たり西行忌  
薄水や人想ふとき二人称  
西行の日の頃の月あかりかな

はこべらや船は大きな石運び  
いしづみに軍馬を称ふ寒雀

横田 暁子

豆撒きにゴルフコンペの夫帰る  
田の水の光集めて春立ちぬ  
雪の鳩足を真赤にして歩く  
美容師の指の冷たし冴返る  
泥凪の菰の上ゆく梅まつり

杉本薬王子

春宵や新携帯は金の色  
田に水を張りて命の輝きぬ  
摘草や良寛さんの籠の中  
高瀬川春の小川となりにけり  
雛の部屋わらべ唄ありあられあり

◇特別作品◇(抄)

ふるさと

佐山 五稜

流水の軋みし音や旅枕  
国後の地図貼る駅や春の雷  
水辺まだ春遠かりし羅臼かな  
開拓の残りし一戸つばくらめ  
リラの花零れて日暮れ早めけり  
勿忘草修道院のミサの鐘  
鳥賊干せる母の昭和を忘れえず  
ふるさとは一望千里馬鈴薯の花  
果てしなく広がる銀河島に住む  
霧笛鳴く国後島は遠き島



# 風土独語／神蔵器



いきいきと鶺殿の蘆は火となりぬ

浅田 光代

鶺殿の蘆は、摂津国鶺殿（今の大阪府高槻市）に生える蘆である。国語大辞典によれば、古来、笙（しょう）・箏（ひちりき）の舌に用い、特に著名であることからこの名がある、という。

謡曲江口に

都をばまだ夜深きに旅立ちて

淀の川舟行く末は 鶺殿の蘆の

ほの見えし

（浮世草子）

などに見られる。

淀川は琵琶湖を水源とする瀬田川に始まる宇治川に、桂川・木津川が合流する地点から下流で、淀川の広大な流域、鶺殿の蘆焼きである。

なお、蘆火・蘆焼きは歳時記では、秋の季語になっているが、この句の蘆焼きは、若草山の山焼や箱根仙石原の葦焼きなどと同じ様な目的を持って、鶺殿の蘆焼きは、毎年二月の大事な行事になっている。当然春の季語である。

一たび蘆原に火が放たれば、晴天の風の無い日を選んで、火は蘆に燃えつき、葎は火をまねき、火は火を育て、風は風を呼んで、たちまち広大な鶺殿は火の炎にあおられ、火の渦につまわれる。もはや人間の手を離れ、天上の神の手のみである。

蘆焼きは苛酷でもっとも厳しい。しかし、無になるためのものではない。火の音、風の音、空の音、水の音、そして何より燃える蘆のはじける音に生まれ変わるためのシンフォニー、歓喜の大合唱である。掲出句の「いきいき」は、まさに鶺殿の蘆ならではののちの火のいきいきである。

海苔淇や湾の陽光うたひ出す

森田 節子

海苔は養殖の場合、海苔粗朶といっている淇を浅海に立てるもの、晩秋の仕事である。

淇の間に付着した海苔の胞子は、寒くなるにつれて成長して、冬から春のころに繁茂する。従って海苔の採取、海苔採、海苔掻きは冬から春にかけての仕事である。歳時記では、海苔、海苔淇、海苔粗朶、海苔舟、海苔採、海苔干すなど海苔に関することはおよそ春の季語になっている。

さて、東京湾で海苔と言え、私などはすぐ大森海岸が思い出されるのであるが、ここはとうに埋め立てで消えている。また、養殖の方法も沖合に網を張ったの養殖で、収穫も、電気器具に吸引して採取をしているなどと聞いている。はたして、東京湾で海

苔浜を立て、海苔舟に乗って手作業で海苔を摘んでいるところなどあるのか心もとなくなってしまう。以下は作者に直接聞いたところである。

〈場所は東京湾も木更津の海、時は早春、二月のよく晴れた日であった。きらきらとさざ波がかがやき、浜の間を二、三の海苔舟が止まっているのか走っているのか漂うように眺められた〉  
何かむかしながらの養殖風景である。「陽光うたひ出す」は、全身で春のおとずれに酔っている。



# 風土集



## 神蔵器選

いきいきと鶺殿の蘆は火となりぬ

高槻

浅田 光代

川へきて蘆焼の炎のそり返る

よぎりゆく鳥声末黒離れずに

白梅を寒天干しの過ぎりけり

草萌ゆる地震観測計蔵し

まんさくや出入り一つの村の口

津山

生田恵美子

約款の小文字びつしり冴返る

町割の古りし看板下萌ゆる

梅見山声まつすぐに降りてくる

九十の素眼の読書水温む

立春のチェロが改札通り抜け

川崎

森田 節子

水平線の雲金色や実朝忌

敷石の丸く濡るるや春の雪

西行忌大活字の歌集かな

春北風や太郎の母の塔立てり

柳むし子を自慢して売られけり

東京

大場光よし

春の日や鮎屋の桶の幾重ね

沈丁の匂ふ仏や派手好み

外来の呼び出しマイクも花曇

八重椿羽根落つ如く地に咲けり

円空に鉈一丁や寒明くる

福生

雨宮 桂子

粗彫のほとけ一人春立てり

円空の袈裟山百首木々芽吹く

少年のこぶしの固し春北風

立春や円位堂よりひかり満つ

薄氷の引き合ひ矢羽根模様かな

川崎

鈴木 庸子

梅ふふむ十戸で守る瘡守社

春めくや出窓に野鳥凶鑑置き

受験生預かりし間の灯かな

笹子鳴く里山保全の予定表